



## 『 辻 与次郎の雪見灯籠 』

2007年5月、学生時代の部活仲間たちと京都を散策しました。主な名所は高台寺・三千院と寂光院。大原の寂光院、門を入ると正面に新築の本堂、お堂に上がってお坊さんに、その創建や火災（平成12年）のことなどを教わり、火災の時に出了胎内仏を見学しました。お堂を出て、古びた桐の紋を透かしたりっぱな鉄製の灯籠を見つけました。『何か由来がありそうだ』そう思った私は事務所に入り、係の女性に尋ねました。宝物殿の所蔵品リストを出して彼女は『与次郎作、南蛮鉄を使う』と書かれています、と教えて頂きました。やはり由緒のある品だったのです。もとは豊臣秀吉が隠居所として建てた伏見城（1592年）にあったものです。いつ誰が寂光院に持って来たかは不明ですが、南蛮鉄で作られたとの記事に興味を沸き、釜のことを少し調べてみました。

従来、芦屋釜（福岡県遠賀郡）、天明命釜（栃木県佐野市）が主要産地でしたが、三條釜座（京都市）が主流になってきました。



それを可能にした必然的といってよい条件が考えられる。まず第一は使用する鉄の材質による有利であった。この頃、南蛮貿易船が運んできた南蛮鉄が堺や京では入手し易くなったことと、生活文化の向上に伴って古鉄の回収量が多くなり、この両者を混用した地鉄は砂鉄製錬のものよりも燐分混入率が高かった。このために溶解した鉄の流動性が高まる。これに加えて近江など京都の近隣地方で木炭の質の改良がおこなわれたので、材料の鉄・加熱の木炭両方の力が合体して、熔融温度の上昇という、鑄造技術の上で最も有利な進歩が実現した。しかもさらに良かったのは、京都桂川の砂汁を鑄型に叩き込み、その表面をいっそう滑らかにするという新技法が開発されたので、材料—熔融温度—鑄型—工人の感覚という四拍子揃った全面的な革新の結果として、京釜の鉄鑄肌実はかつてない洗練された微妙な味わいを滲み出させたのである。これは天明・芦屋に見られなかった新しい時代を開く造型美であり、伝統離れを念願する新しい覇権者、新興の武将・豪商の心にピッタリとかなうものであった。

和鉄の文化 井塚 政義 八重岳書房 1984年 P92 より部分抜粋

### 参考資料

和鉄の文化 井塚 政義 八重岳書房 1984年

### ごめんなさい。（誤り訂正）

『夢通信』6月号、鉄炮伝来 その2 の記事に誤りがありました。鉄炮伝来当初から雌ねじを切るタップと雄ねじを切るダイスが存在したのです。

正しくは『鉄炮伝来当初から雌ねじを切るタップが存在したのです。』

著者の一人、峯田元治さまに大変ご迷惑をお掛けしました。

火縄銃の伝来と技術 佐々木 稔 編、吉川弘文館(2003)

メール ryou@memenet.or.jp

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！